

第3回 クラスがつながる絵本の読み聞かせ



講師 田代 康子 氏

はじめに

皆さんは毎日保育の中で絵本をお読みになっていると思います。実は絵本は、大人と子どもとは読み方がまったく違います。このことをよく認識すると、一層楽しく読むことができます。

1 絵本の醍醐味は「読み聞かせ」でこそ

私は、「読み聞かせ」という言葉の使役動詞『聞かせる』に違和感を覚えます。幼児の場合、「読み聞かせ」という言葉をあえて言い替えるなら、私は「読み遊び」だと思っています。今日は、便宜上「読み聞かせ」を使います。最近は、「絵本を読む」でいいのではないかとと思っています。

1) 絵本の三つの要素

まず、絵本というのは、何と何でできているでしょう。「絵と文でできているのが絵本」と答える方もいると思いますが、これは子どもを知らない大人の認識不足の表れです。「ページをめくる」ということが、絵本の中でとても大事な要素を担っているのです。

2) 子どもの読み方は「読み聞かせ」・・・三つの要素が一体になる

皆さんいつもは子どもの側に立って絵本を聞くということがないと思います。他の保育者が読んでいるのを聞いているつもりでも、「動く子どもをどう静かにさせようか」とか「あの子、どこかに行ってしまうから見ていない」ということばかり考え、心をまっさらにして絵本を楽しむということがないのです。今日はスクリーンに絵本の画面が出ます

ので、子どもと同じように文を聞きながらそれを見て、自分がどのように感じるのかを意識してください。

音読 『すいかのたね』 さとうきわこ作・絵

ここで質問です。ばばあちゃんは、すいかのたねをどこにしまっていたでしょうか。ご存知かと思いますが、意外とわかってないのが、大人の見方です。子どもは、一回読んだだけで気がついていきます。

表紙では種は黄色いガラスのビンに入っています。子どもは、絵を見ています。耳で文章を聞き、聞きながら絵を見ています。大人は、表紙のタイトルを読み、中表紙をめくり、またタイトルが出てくるので“また出てきちゃったわ”と思って題名をとばしてしまいます。

中表紙の絵でお話が進んでいる絵本も結構あります。子どもは、文章を聞きながら、絵を焦点化して見えています。これが、子どもの読み方です。

目で絵を見て耳で文を聞いて、ページをめくる時に心が動くのです。ですから、いい加減にページをめくってはいけないのです。文章を読み終わったら、もう一度絵を見て、うわあ〜という心の動きをためてから、パッとめくるとすごく楽しい読み聞かせができます。

3) 読んでもらっているとき、心が動くのが楽しい

子どもにとって一番楽しいのは、読んでもらっている時、ワクワク、ドキドキ、ハラハラ、悲しいなど心が動くことです。文を聞きながら絵を楽しめるのが絵本の醍醐味です。

2 絵本が「つなぎ」なんてもったいない！

1)保育の場だから絵本が楽しい！

心が動いた時の子どもの姿を、頭の中に思い描くことができますか。“ああ！この間、あの絵本を読んだ時の子どもたち、こんなふうだったな”と思い浮かぶでしょう。子どもの表情や手の動きと体の動きを見ていると、心の動きがよくわかります。

例えば『ねないこだれだ』の絵本を2歳児クラスで読んだ時のことです。「おぼけのせかいにとんでいけ」のところ子どもは「わあ～！怖い」という表情で見えています。いつもうろうろしている子ども「え！？」と見に来ています。このような子どもの表情を見たら、保育者は“スリリング～！って思っているなあ”と、嬉しくなるでしょう。

心の動きは、子どもの表情や雰囲気やおしゃべりにも表れます。ですから、絵本を読む時には心を込めて、いい時間帯に読む必要があります。絵本がつなぎだなんてもったいない。これが、今日私が一番に伝えたいことです。

保育の場だから、絵本が楽しい。つまり、同じくらいの年齢の子どもと一緒にいる集団に向けて読みますから、一対一では絶対に味わえない、仲間と一緒に読むという楽しさがあります。そして、大好きな先生が自分に読んでくれるという楽しみもあるのです。つまり、仲間とつながる、保育者など大人ともつながる、絶好の機会です。

長新太さんの『たぬきのじどうしゃ』を読んだ時のことです。3歳の子たちが顔を見合わせて「おもしろいね～」と笑い合っています。でも後ろで見ている子は「つまんな～い」という表情をしています。この子はまだこのおもしろさがわかっていないのでしょう。一緒にいながらも反応はいろいろです。雰囲気として楽しさを味わうことができればいいと思います。

1歳児クラスで『びゅ～んびゅ～ん』という本を

読みました。「びゅ～ん！」と言ったら、この子が「わあ～！」となっています。この子はみんなの方を向いてやっています。“おもしろいよね！”と言わんばかりです。すると向かいに座っている子どもちゃんと応えます。こうしたことは、絵本を読んでいる時に起きていますが、読んでいる側はそこまで目配りできないこともあります。読み聞かせは、読み手と子どものアイコンタクトをたくさんします。

2歳児クラス『わたしのて』という本では、子どもが私の方を見て笑っています。子どもは「おもしろいね」と思った時に、読み手の大人や後ろで見ている大人と目を合わせ、楽しいという気持ちを伝えてきます。私はその時“大人を信頼している時だなあ”と、いつも思います。

読み聞かせをしていると、私のひざに手をかけてくる子がいます。毎回日替わり、違う子がきます。それでいいのです。仲間を見たり、先生を見たり互いに視線が合うのです。先生を見て笑ったり、読み手を見て笑ったり、子どもの自然な姿がリラックスした状態と言えます。子どもと一緒に絵本を読むということは、子どもたちと読み手とでたった一つの絵本の世界を作り出すことです。子どもの反応があり、それを感じて読む楽しさは、最高です。息遣いを感じながら、双方が“あなたがそんなに楽しいって言うのなら、もっと笑わせちゃおう”というふうに変わってくる。しんみりしていると“よし、この雰囲気を壊さないでいてあげよう”と皆さんも思うでしょう。これが、ライブの魅力です。子どもに「もぞもぞ動くな、もう読みません！」と言うのは絶対やってはいけないことです。読み聞かせは楽しい時間、楽しい時間なら子どもたちは自ずとルールを守るようになります。

2)みんなが知っているから、次の活動へと展開できる

クラスのみんなが同じ絵本を一緒に楽しんでいると、次の活動へ展開できます。散歩に行った時、

突然誰かが「なんか、あぶのぶんべえが出てきそう」なんて言うと、みんなピンときて、その後何かで遊べます。それができるのが、みんなで読む楽しさです。私は、それを「絵本でクラスの文化を作る」と考えています。「今日も、また読むの？」と保育者が言うくらい、毎日子どもが「もう1回読んで」と言うくらいのもので、クラスの文化です。クラスの文化で子どもはつながります。仲間・クラス・集団がつながるチャンスで活動の基盤になります。ですから「ちょっと時間が余ったから読もうかな、これでいいや」という読み方はやめましょう。もっとゆったりした時間に読む必要があります。そこで、絵本の時間を保育計画に位置付け、園として絵本の時間を保障しましょう。私は、昼寝の前に絵本を読むのはやめた方がいいと思います。おもしろい絵本を読んだら、子どもは絶対に興奮してしまうからです。もっとよい時間、頭がさわやかで“わあ～！絵本の時間だ”と子どもが楽しみにする時間に読んでほしいと思います。

3. 心が動く楽しさ

1) 子どもに人気の絵本—おもしろがる子どもの心の動きをもとに—

心が動く楽しさが、今日のもう一つのテーマです。心が動くということは、絵本によって違います。『おだんごぱん』という本は、少しインパクトに欠けるかと思われるかもしれませんが、子どものテンポには非常によく合っています。我が家では娘がたくさん読みました。

おだんごぱんがころころ転がってきて、最後の方でいよいよキツネに騙されて食べられそうになる場面で、いつものように読んでいたら、突然娘が「もういい！」と言って、無理やり終わりにしようとしたため、破れてしまいました。なぜ彼女は、このページで「もういい！」と言って最後まで読ませなかったのか。彼女は何度も読んでいたので、キツネに食べられてしまう悲惨な結末を知っています。突然

この時、おだんごぱんが食べられちゃう、かわいそう、じっと聞いていられないとなったのです。そういう心の動きもあります。

それから片山健さんのコッコさんシリーズ『だーれもない だーれもない』もよい本ですが、絶版なのが残念です。このお話は、コッコさんが、お母さんに抱っこされて「ないて ないて なきました」という場面で終わります。

読み終わった時、子どもはシーンとして聞いていたのですが、コッコさんがお母さんと会えるとほっとした顔になり、「はるちゃんも誰もいなかったんだよ」「かっちゃんも寂しかったの」「お母さんいなかったの、ゆき泣いちゃうの」と、一人一人が、お母さんがいなかった時の体験を語り出しました。コッコさんと自分を重ねているのです。さらにすごいのは、かっちゃんが「かっちゃんも寂しかったの」と言ったことです。絵本には寂しいという言葉は、一言もありませんが、寂しいという言葉まで引っ張り出してきたのです。

2) 同じ絵本でも年齢によって異なる心の動き

私は子どもの心の動きで、本を分類しようと考えました。なぜ、子どもはこういう心の動きをするのかと考えた時、私は心理学が専門なので心理学的に考えてみたいと思いました。それで、皆さんのお手元にある絵本リスト『子どもに人気の絵本リスト—おもしろがる心の動きをもとに』を作りました。同じ絵本でも年齢によって違う心の動きをします。私は「1歳で読んだらこうだけど、5歳で読んだらこうなんだよね」と思いながら、一番メインのところまで分類しています。

モーリス・センダック作の『かいじゅうたちのいるところ』は、何歳児クラスで読みますか。私は、各年齢でどんな変化があるか見てみようと思い、1歳児クラスで読んでみたところ、好評でした。1歳の冬なので、ほとんどの子が2歳になっています。

まず表紙を見ると「コワイコワイ」と言います。1歳児の「コワイ」は、コワイというフレーズを楽しんでいるところがあります。すると必ず「コワクナイ」と見栄を張る子が出てきます。「コワイ」「コワクナイ」のやり取りが楽しくなってきます。かいじゅうがずらっと並ぶページになると、あんなに怖がっていた子どもが、かいじゅうを指さして「コレ、なおちゃん！」と自分の名前を言うのです。すると「けいちゃんコレ！」と言いながらみんなが前に出てきて、コワイコワイと言っていたかいじゅうを指さして自分の名前を連呼する状態が、楽しいです。こういう「コワイコワイがおもしろい」という楽しみ方が1歳児です。

ところが、5歳児の秋のこと、この絵本を読んだ3回目のことです。「本当にマックスはかいじゅう島に行ったのか」という話になりました。発端は、かっちゃんの「あれ、夢だったんだよ」という言葉でした。いつもなら「そうだよね」と言う子がいそうなのに、この時は他の子がこぞって「違うよ！本当だよ！」「夢じゃないよ」と力強く反論したのです。「夢だもん」「夢じゃないもん」「また戻ってきたんだもん」「夢じゃない、だって朝だったんだもん」と言い合っていたのです。すると、みさきちゃんが「本を見せて」と言いました。ページをめくり「夢じゃないよ！月を見てごらん！」「ほら、初めは三日月だったのに、最後はまん丸になってる！」と言ったのです。私は、夢を見たとき軽く思っていたので、三日月と満月の違いに気が付かず、びっくりしました。かっちゃんもびっくりでした。このみさきちゃんの発見に呆然としていました。

同じ絵本でも5歳児になるとこういう発見がおもしろくなってくるのですね。子どもは大好きな大人に絵本を読んでもらって心が動くのが楽しいのです。大人の楽しみは、子どもが心動かしているのをビビットに感じることです。子どもの心の動きと一緒に楽しみたいと思います。

4. ハラハラドキドキがおもしろい

1) 狼が飛び込む前の場面で「狼！」「開けちゃだめ」と叫ぶ心の動き

フェリクス・ホフマン絵、瀬田貞二訳のグリム童話の『おおかみと七ひきのこやぎ』（福音館書店）は、私が絵本研究を始めたきっかけとなった本です。

「おおかみと七ひきのこやぎ」の読み聞かせのCDを聴く私は、読み聞かせ中に子どもが話すのは禁止しません。「しゃべっていいよ」と言っています。

おおかみが飛び込んでくる前に、手で顔を覆う子もいましたが、指の間からちゃんと絵を見えています。そしておおかみが入ってくる前に「おおかみー！」と叫んでいる子どもたちがいます。よくあることです。実年齢4歳くらいの子たちに人気のお話ですが、だいたいみんなそう言います。なぜ子どもたちはそこで「おおかみー！」とか「開けちゃだめー！」と叫ぶのでしょうか。その心の動きは何だと思えますか。

子どもが、こやぎになりきっていると言う人もいますが、こやぎになりきっていたら「わ～い！お母さんだ！おかえりなさい」となるはずです。だからこやぎになりきっているわけではありません。それは、読者である子どもが、登場人物のこやぎたちに向かって叫んでいるのです。そう考えると本当に子どもって素晴らしいなと思います。「自分はおおかみが来てるって知ってるの。だけど、こやぎたちは知らないんだ。だから教えてあげなくちゃ！」と思い、読者として登場人物の身を案じて叫んでいたのです。フェリクス・ホフマンの本は、子どもの心の動きを想定しているのです。

先ほども話したように、子どもは絵を見えています。場面の絵がおおかみ、おおかみ、おおかみときてここで一転してこやぎになります。方法は、サスペンス映画の作り方と全く同じなのです。

2) ハラハラドキドキにくい『おおかみと七ひきのこやぎ』の絵本が多い

絵本は、「絵」と「文」と「ページをめくる」で、できています。フェリクス・ホフマンはこの三つの関係を完璧に作っています。

しかし、そうではない絵本が多いのです。例えば、おおかみが来た時の絵を見ると、子どもの世界の絵ではないものがあります。子どもは、こやぎ側から見るか、おおかみ側から見るかしか知らないのに、説明図になっているものがあります。フェリクス・ホフマンの絵本は、

―戸を開けました。ところが入ってきたのは―
と、ここまで入っているのです。ですからページをめくると

―おおかみでした！―

となるので、子どもたちが“お、おお～”と思うのです。こういう神経の使い方が、「絵」と「文」と「ページをめくる」の関係性です。子どもは、心の動きが楽しい本は何回でも読みたがります。フェリクス・ホフマンの『おおかみと七ひきのこやぎ』は何回も読んでとせがまれます。ストーリーは知っていても、最初にハラハラドキドキした感情を味わいたいのでしょう。

心が動きにくい絵本は、絵本を読んでいる最中に「知ってる。その話知ってる」と言う子を生み出します。

そして、絵の問題もあります。『おおかみと七ひきのこやぎ』の話は有名でいろいろな出版社が出しています。絶対「おおかみだってわかっているのに、なんで戸を開けるの？」と子どもが言うような絵もあります。子どもがどう感ずるかということは何も考えずに、さらっと描いてしまうのだな思います。

文の問題もあります。形容詞や形容動詞を使わなくても、悲しい、寂しい、怖いなどが伝わるような文の格調高さが求められてきます。そう思うきっかけとなったのが、評論家であり、作家で、翻訳家の丸谷才一さんの「絵本の文体は、子どもが人生で最

初に出会う文体だ」という言葉です。ですから子どもに良い文の絵本を読んであげてください。

「絵」と「文」と「ページをめくる」、この三つの関係を吟味したら、ハラハラドキドキの本がかなり識別できます。

最後に、これからも子どもの心の動きを感じて読んでください。それをキャッチするにはどうしたら良いか。読み聞かせ中の子どもの息遣いを感じてください。ページをめくるタイミングも間もこれで決まります。ですから、読んでいる最中に子どもが見られない読み方は、やめた方がいいです。とても難しいことですので、まず自分で声を出して読む練習はしてほしいと思います。それから間を作るために句読点を大事にすると、間が取れて子どもの顔も見ることができます。読点はちょっと息を止めるくらいで、句点では、空気をたくさん吸ってください。すると子どもの顔が見られます。それぐらいのテンポがちょうどいいでしょう。それから、読み聞かせ中のおしゃべりを大切に。リラックスの最たるものは「言いたいこと、しゃべっていいよ」です。読み終わった後、子どもたちがいろいろなことを言うと思います。もしかしたら、部屋の隅っこのでの二人の会話が絵本の話だということもあります。そういうのを耳をダンボにして聞いていると、その後の活動につながる可能性があります。

絵本で心が動きます。絵本でクラスがつながります。絵本で保育が展開できます。楽しい絵本の時間を子どもに作ってあげてください。

第3回 焼津市保育者資質向上研修会
令和元年9月17日(火)
会場：焼津公民館 大会議室